

# 山びこ通信

山の学校  
LUDUS COLLINUS

しぜん<sub>3</sub> イタリア語<sub>15</sub> ラテン語<sub>17</sub> ウェブプログラミング ロシア語<sub>16</sub>  
歴史 ギリシャ語<sub>18</sub> かいが<sub>4</sub> ユークリッド幾何<sub>11</sub> フランス語<sub>16</sub> 数学<sub>9</sub>  
ことば<sub>7</sub> つくる<sub>6</sub> 漢文 かず<sub>8</sub> ドイツ語 イベント 将棋道場<sub>19</sub> イベント 勉強会<sub>20</sub>  
英語<sub>10</sub> ロボット工作<sub>12</sub> 山の学校ゼミ(社会<sub>14</sub>/数学<sub>13</sub>/調査研究/法律/経済<sub>14</sub>/生活と文化)

## 「子どもは大人の父である」考 —山の学校の目指すもの

山の学校代表 山下太郎

英国の詩人ワーズワースに『虹』と題する詩がある。

私の心は躍る、  
空に虹を見るときに。  
子どもの頃もそうだった。  
大人になった今もそうだ。  
年老いてもそうありたい、  
さもなくば死に至らしめよ。  
子どもは大人の父である。  
願わくばわが人生の一日一日が  
自然を敬う気持ちで結ばれんことを。

7行目の「子どもは大人の父である」という言葉は、どこかで目にしたという人も多いのではないだろうか。だが、ここで言われる「子ども」と「大人」の関係について深く考えれば切りがなく、また、人によって受け止め方は様々だと思われる。

司馬遼太郎はこの言葉に言及した上で次のように述べている。「私の中の小学生が、物や事を感じさせてきて、私の中のオトナが、それを論理化し、修辞を加えてきたにすぎないのかと思ったりします。もっとも心にコドモがいなくなっているオトナがいますが、それは話にも値しない人間のヒモノですね」と。(『こどもはオトナの父—司馬遼太郎の心の手紙』、神山育子著、朝日出版社)。

教育に携わる人間にとって、このメッセージの持つ意味は重い。幼児教育はコドモを守ることを使命とするが、人は一人で生きられない以上、子どもの中のオトナの萌芽を大切に育てる努力も欠くことはできない。ここで言う「コドモ」とは感受性や好奇心、「オトナ」は理性や社会性といったものを指すだろう。しかし、教育の現場において、このバランスを図ることは頭で考えるほど簡単ではない。

私は日頃幼稚園児を引率しながら山道を歩くが、子どもたちはタケノコがぐんぐん伸びる様子やアリが行列を作っている様子に興味津々である。先日は晴天にもかかわらず太陽のそばに虹を見つけた子がいて、みなで時を忘れて見つめた。だが、子どもたちの好奇心につきあっていると、いつになっても目的地につかない。ほどよいタイミングを見計らって子どもたちの関心を再び歩くことに向けさせねばならない。幼児教育の現場は、この手の葛藤に満ちている。幼児教育に限らない。学校教育の現場もそうであろうし、逆説に聞こえるかもしれないが、先生方にはこの葛藤を大切にしてくださいと願う。

というのも、学校が子どもたちに知識や正解を教える所であると肩に力を入れるほど、やがて先

生の心から葛藤は消え、コドモを守ることは困難になるだろうから。例えば知識の多寡を数字の評価に置き換えた勉強は、効率を優先するあまり、好奇心や感受性を二の次、三の次にしてしまう。そのような学校は時刻表通りにバスは運行されるが、先生と生徒が同じ虹を見て感動を分かち合う場面はなくなるだろう。ちょうど路線バスの運転手が虹を目にしてバスを停めることはないように。

私の中学時代を振り返ると、国語の時間が極端に退屈であったことを思い出す。理由は、先生が正解を黒板に書き、それをノートに写すように求められたからだ。文中の「それ」が何を指すかと問われ、その答えを丁寧に板書される。最前列で腕を組んで見ていたら「ちゃんと写せ」と叱られた。該当箇所は教科書に自分で印をつけたと答えても「写せ」と言われた（ついでながら、試験で池の「まわり」を「周り」と書いて×だった。教科書に「回り」と書いてあるから）。中学に入ったばかりの思い出である。ただ、このクラスが例外であったわけではなく、中高6年間の授業の暗黙の了解は、科目を問わず、いつも「黒板を写せ」、「ここを試験に出す」の一点張りであったと言うことはできる（この言い方は少し言い過ぎかもしれない。「葛藤」をお持ちの先生も少なからずおられたと記憶する。数学の先生で「わからない問題は一日中考えたっていい」と言われた方もいらした）。

いずれにせよ、私の中のコドモは家庭教師の先生に救われた。当時京大理学部の院生であった上田哲行先生である。父は最初の面談で「受験勉強は教えないで結構です」と切り出したのを昨日のこのように思い出す。では毎回何をしたかと言うと、一冊の本を音読し中身について語り合う、という（一見）ありきたりなことであった。だが、実際にはこれがどれだけ貴重な経験であったことか。40年経った今も感謝の気持ちで心が満たされる。

先生は一冊の本を最初から最後まで丁寧に読むことの大切さを身をもって教えて下さった。『森のひびき—わたしと小鳥との対話』（中村登流）から始まり、『ソロモンの指輪』（コンラート・ローレンツ）や『チョウはなぜ飛ぶか』（日高敏隆）といった啓蒙書の数々、また、『科学的人間の形成』（八杉龍一）など、中学生にはやや難解に思える図書も先生はあえて選ばれた。内容に関する作文は毎回宿題として課され、翌週懇切丁寧に添削を受けたことも忘れがたい思い出だ。

ただ、先生にも葛藤があったのかもしれない（あるいは受験を意識し始めた私への配慮だったのかも知れない）。高校時代に入ると数学や現代国語の入試問題を解くスタイルに変わっていった。しかし、ここが大事なポイントであるが、先生は私と同じ問題をご自分でも解かれ、同時に、私が納得のゆくまで考える姿をいつも横で見守り、適切なアドバイスを下さった（考える主体はいつも私）。

と、ここまで書きながら思い当たることがある。11年前、無我夢中で始めた山の学校であったが、そのコンセプトの源流は、今述べたような私の個人的体験に遡るのではなかったか、と。事実、私の目には、山の学校の先生の姿と上田先生の姿が重なって見えるのである。黒板を使った一斉指導ではなく、一人一人のニーズに寄り添い、じっくりと考える時間を何より大切にする。そんなクラスの雰囲気については、次頁以下でご確認頂きたい。

教える者も学ぶ者も、本来誰もが自分の、そして、他人のコドモを守るオトナでありたいと願う。だが、司馬氏が警告したように、この前提は当たり前ではない。山の学校の取り組みは、子どもたちの、また、自分自身の中のコドモを守ることをよしとする保護者や会員のお陰で成り立つのである。この事実を深く心で受け止め、また一步一步進んでいきたいと思う。

山下太郎



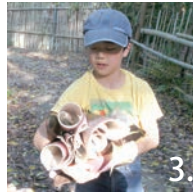


1.

▲ 幼虫が仲良く並んでいます。不思議!



2.



3.

▶ タケノコの観察は恒例行事。

▼ 険しい道をいきます。



4.



5.



6.



7.



8.



9.



10.



11.



12.



13.

▲ 積極的にお手本を示してくれる M ちゃん。

クラスの冒頭、家で書いてきた「しぜん日記」などの発表が終わると、「先生！外行こうよ！」待ちかねたように何人かが叫びます。「じゃあ、今日はどんなルートを辿ろうか。皆で話し合いながら行こう！」そう告げて、帽子や水筒を装備し、時に何かを記録する用紙や、拾集物を入れるビニール手提げなども持って、教室を飛び出していきます。しぜんクラスはいつも、こんな風にして始まります。

ある5月のA(火曜日)クラス。石段を駆け上がり、「ひみつの庭」の中をぐるぐるの散策し、池をひとしきり覗き込んだ後、奥へと続く「ひみつの森」へ。森へ入ったとたん、「何これ!」「不思議〜!」面白い発見が皆を捉えます(写真1.~4.)。「ねえ、沢へ行こうよ」ふいに誰かが言います。「そうだね、暫く行ってないものね!」「行こう行こう!」「こっちの道だっけ?」「違うよ、こっちだよ!」そうして、森の奥からつづら折りの険しい坂道を下っていきます。昨年度に一度、同じ道を通りました。ほの暗く鬱蒼とした道に心細さを覚えたのか、当時、最後尾にいる私の隣で弱音を吐いていた1年生が、今は2年生となり、意気揚々と先頭集団に加わっています。その頼もしい背中を見守りながら、この日が初参加となる隣にいた1年生MS君に「大丈夫?」と声をかけてみると、「僕は、もっともっとアドベンチャーをしたいんだ!」と目をらんらんと輝かせています(写真5.)。

行く手を阻む倒木を乗り越え、沢まで駆け降り、しばらく流れを辿ってから、丸木の一本橋を渡ったそのときでした。上流の方で、沢中にこだまするくらい大きな、何かの鳴き声が出て、全員がびたりと足を止め、時間が止まりました。次の瞬間、一人一人がやや前屈みに忍び足で、声の聴こえた方へ向かいだしました。「突き止めよう。」無言の合意がなされ、一つになった瞬間でした(写真6.7.)。

断続的に響いてくる鳴き声に、その都度足を止めては耳を澄ませ、息を殺しながら、とうとうみんなは声の発信源であった「蛙の隠れ家」を突き止めたのでした(写真8.)。

「今度は上流のまだ行ったことがないところまで目指そうよ」などと話しながら、ここそこの見えない穴ぐらに大きくこだまする蛙の鳴き声に包まれながら、帰り道の沢をみんなと下りました。帰り道にも、発見は尽きません(写真9.~11.)。

B(木曜)クラスでは、今ではすっかりクラスのリーダーとなった5年生のMちゃんに導かれるように、活発な1年生達と、「しぜんの工作」をする流れができつつあります。森で拾集した材料を使って、一体どんなものが作れるか、各々のアイデアを自由に膨らませ始めているところです。Mちゃんは既に、カスタネットをもう一度作ることに決めています。昨年度の冬学期にRちゃんと苦心して作ったものは、手のひらで打合わせるには少々サイズが小さかったからです。理想を追い求めてひとつのことに継続的に向かう彼女の姿勢を大変尊く思います。それが、至って自然なものであるからこそ、尚のことです。後輩の1年生たちにとっても、何か大きなインパクトとなることでしょう。

材料集めに森へ出かけると、間伐で出た、手頃な丸太や枝が横たわっています。子ども達は誰に言われるともなくそうしたものを囲み、吟味し、懸命にのこぎりを引きはじめます。木を押さえる人、のこを引く人、チームワークが自ずと生ま





▲折れた木片のギザギザが、木の枝の皮削り機に！

れます(写真12.13.)。中には、間伐で出来た切り株の方に目をつけた生徒もいます。Ta君は太さ15センチ程の檜の切り株の上方を輪切りにしました。しっとりとした断面。「いい匂い!」「虫除けみたいな匂いだね!」

クラス残り時間も10分不足だったので、その日は園庭で遊ぶことに。芝生に大の字に横たわり、目を閉じるTo君。「こうしていると、色んな音が聞こえるんだ・・・。」私も仲間たちも、横で大の字になります。彼は前回クラスの時、森の奥でみんなで耳に手を当てて、耳を澄ませてみる、という時間のことを覚えてくれていたのかもしれませんが(写真14.)。

「これ、駒にしようかなあ、フリッスビーにもなるかなあ」などと言いながら、Ta君が何気なく先ほどの「輪切り」を放り投げました。するとどうでしょう。輪切りは歪に揺れた後、コロコロとまっすぐ園庭を転がり始めました。「面白いね!センセイにもやらせて!」そういって今度はボーリングの玉を転がすように、構えて投げてみました。よく転がりますし、その感触の気持ちよさ!「僕にもやらせて!」「僕も!」代わる代わる、ボーリング遊びが始まりました。「今のはガータだよ!」ジャングルグロープの上からSちゃんが言います。「ピンもあればいいねえ。的があれば、カーリングっぽいゲームもできそう!」気付けば地面にレーンの線が引



▲叩く場所によって音がかわる!

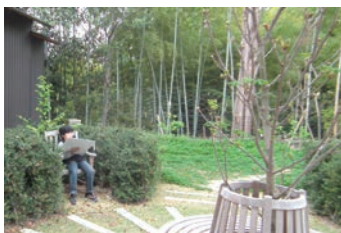


かれたり、男の子たちは転がした輪切りを追いかけて捕まえる遊びをしたりし始めました(写真15.~17.)。そうこうしているうちに、檜の皮がぼろっと外れました。「湿ってるね!」「つるつるしてる!」肌にあてるとひんやりして気持ちがいいです。

「ああ、この瞬間のために、今日のクラスの時間があつたのだ・・・!」と思える瞬間たち。子どもたち自身によってクラスが導かれるように、さりげなく導けたなら。よきクロコとなれるよう、これからも尽力して参ります。

## 『かいが』(A・B)

担当 梁川 健哲



### ● 外で描こう

かいがクラスでは、折々に表題の課題制作を行っています。学期最初のクラスでみんなに伝えたことは、「視点を探そう」ということです。

試しに、今教室で椅子に腰掛けているみんなに、一人ずつ机の上に立ってもらいました。次に、床に寝そべってもらいました。これだけで、いつもの教室の見え方も、感じ方も、全く違ってきます。つまり、何か面白い視点を見つげようとするとき、足を使い、体を動かすことが役に立ちます。

また、外「で」描くのですから、じっくりと風景や草木を観察するもよし、気に入ったものをいくつも一枚に描きこむもよし、目にしたものを手がかりに空想を広げるもよしです。まずは何も持たずに教室を出て、足を使って、体を使って・・・。描くことはそこから始まっています。





思いがけない出会いや発見をしながら、思い思いの場所に佇み、各々が描く方法を考え、絵を温めていく時間。ワクワクした、楽しい時間。絵に「基本」というものがあるとすれば、そうした時間を積み重ねることではないでしょうか。

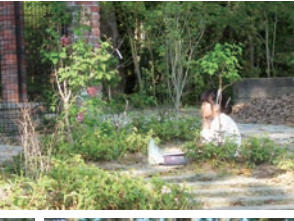
みなさん。慌てずのんびりいきましょう。自由を獲得するための冒険の旅には、まだまだ続きがあるのですから。

### Aクラス

●じっくり対象に向き合うSちゃん。いいなと思う場所があると迷わず腰を据えます。見晴らしの良い築山のてっぺんから、庭越しに眺めた園庭。次に、甘い香りのするバラを見上げて。自分がしてみようと思った描き方で、堂々と…。

●S君は即座に壁泉のライオンを気に入って、勢良く描き進めます。レンガの色を作れて嬉しそう。実物以上の迫力ができました。今度はジャングルジムから眺めたクスノキに挑みます。

●傘のように鮮やかな緑を広げたモミジの下に寝転んで見上げた景色を描くK君。鳥の声や、風のざわめきまで描き込みます。あるときは、水の流れる様子を気に入り、一気に描きあげました。●秘密の庭のベンチに腰かけ、遠山の眼差しで何かを描いています。H君が描いているのは何と、先程石段で見ながら描いていたカラタチの木の続きです。対象から敢えて目をそらし、心の中でその枝葉を自由に伸ばすことを選んだのでしょう。枝には引っかけた帽子。画面上方に、ぼつんと丸が描かれています。「夕焼け?」と尋ねると「うん、月が出てるの。夜の場面にしようと思って…」Sちゃんと、室内での静かな制作模様。



### Bクラス

●浮き出た木の根っ子の中に頭を突っ込むRちゃん。「視点」を探しています。彼女は動き回る猫がじっと座っている瞬間を、撫で続けながら目に焼き付けてすぐに描きました。

●Iちゃんも猫を描きます。ただし、その猫は、空に浮かぶ雲の上でウトウトしていて、頭の上には先ほど彼女が拾った花びらをのせています。庭で出会ったイモムシの背中がすごくスベスベしているのに感激して、RちゃんやM君、Fちゃんといつまでも一緒に可愛がっていました。

●Iちゃんは、木蓮の花を描き、背景を夕焼け色に染めました。それは、Iちゃんが獲得して久しい、お気に入りの色なのです。今度は蔓紫陽花の花を描きはじめました。「花のこのころはガーゼを押し当てて描こうと思って…」

●昨年、同じ季節に色鉛筆で描いたニチニチソウを、もう一度描いたYちゃん。今回はさらに画面いっぱい。気に入った画題は何度描いてもよいのです。そして、今は池を描いています。

●「そうだ! 蟻がね、葉っぱを船にして乗っているような場面にしよう! 一寸法師みたいに!」そう思いついたときのM君の活き活きた表情が忘れられません。池の水の色の試行錯誤を重ねたり。池のほとりで瓶に入れた蟻を観察してもの思いにふけったり。

●ライラックの花房、枝振りを緻密に描くAちゃん。別の場所に咲いていたバラも描き添えました。今度は巨大なクスノキを見上げて描きます。

●Fちゃんは、庭にあった小鳥の石像から描き始めました。ふと姿を消しては、園庭のあちらこちらへ移動して描いています。出来上がった絵には、普段離れ離れの石像—ウサギ、カタツムリ小鳥たちが、花々に囲まれて憩っていました。

※ Bクラスでは雨天の日がありましたが、前回それぞれが心に焼き付けたモチーフに目を凝らしながら、室内で続きの制作をしました。

Aクラスは、1～2年生のクラスです。工作好きの男の子が集まってくれました。春学期は、空き箱を使って、思い思いに工作を展開してもらいました。丸い筒が、望遠鏡に見えた人はそれを作り、戦車の大砲に見えた人はそれを手がけ、ロボットの胴体に見えた人は…と、想像することは様々です。私自身が童心にかえり、「それええなあ！」と、生徒たちの「カッコいい」を応援しています。

最近では、ダンボールで剣や盾を作りました。このテーマは生徒たちのイメージを特に刺激したようでした。ダンボールを折り曲げて芯材を作るとは、適度に彼らの「思い通りにならない」ことで、反対にセロテープでぐるぐる巻きにすることは、適度に「思い通りになる」ことでした。またその間に克服できたことが織り交ざり、バランスよく充実した取り組みとなりました。

イメージは自分だけの宝物です。それをどうやったら形にすることができるか。そのための工夫をクラスで見つけ出し、できたことを「おお！」と喜び合っています。

新しい道具の使い方もこれから応援していくところです。切る道具には何を使った方がいいのか。カッターナイフか、はさみか、ドリルか、錐か、やすりか、ペンチか、のこぎりか、それとも素手でいけるのか。接着には何が適しているのか。上からガムテープで貼ればいいのか、中から両面テープで固定すればいいのか。あるいは接着ではなくて全体を削って小さくするのがいいのか。固定した場所を回転させたい場合はどうすればいいのか。穴を開けて棒を通せばいいのか、それともネジで留めた方がいいのか。さらに仕上げは何で着色すればいいのか。ペンか、スプレーか、色画用紙か、はたまた色つきの布テープか。

時と場合、材料と道具に応じて、工作の裾野は様々な方向へ広がります。一見して、私が「それはちょっと無理かな…？」と思うようなやり方でも、「やってみたら、できた！」という生徒の声を聞くことがあります。そうした時は、私の方が驚かされる番です。

「このやり方は、ぼくが得意にしてるやり方なんや」と口にできる生徒は「すごい」と思います。勝ち癖をその都度得られるからです。あるいは「そうか！こっちの方が便利やった」と、違った方向から試した人もまた「すごい」です。いずれも「やってみて分かる経験」を蓄えていることになります。

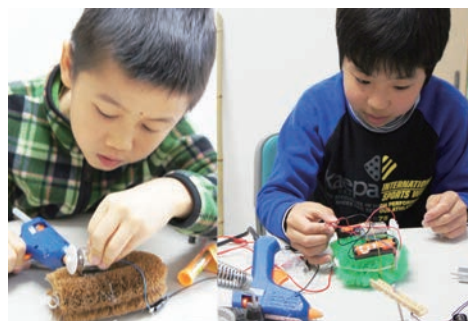


Bクラスは、3年生以上のクラスです。今期は「動く物を作りたい」という生徒と、中学生のロボット工作に興味のある生徒と、2人で取り組んでいます。そこで「電子工作入門」にあたることをしています。

最初は、「タワシ号」を作りました。このからくりは、土台のブラシの毛が、モーターの振動で「猫じゃらし」ようになって前進します。また「リード・スイッチ」という部品を使って、磁力でスイッチングします。作り方と原理はインターネットにある情報を拝借しましたが、モーターや電池ボックスをどうすればタワシの毛の上に固定できるのかといった現実問題をクリアするところで、小学生ならではの柔軟な発想が見られました。特にホットボンドが活躍しました。そして、モーターからタワシにうまく振動が伝わらないのをどうすればいいかと考えて、モーターの軸にプラスチック製のギアを取り付けたり、そのギアにもホットボンドを塗ってわざと振動が不均一になるように加工したり、そしてゴムを巻いてモーターの取り付け位置を微調整したりというような工夫をしてくれました。また、スイッチ用の磁石を手で持つのではなく、割りばしの先に取り付けるといった、ちょっとした工夫こそが実用的で感心しました。

他にも、同じくリード・スイッチを使った「(電池がなくなるまで) 回り続けるコマ」や、電磁石の原理で動く「コイル・モーター」などを自作しました。特にコマが回った時には、「ほんまや！」となり、純粋に好奇心を掻き立てられる体験を共有しました。

そうは言っても、「百聞は一見にしかず」です。両クラスの具体的な雰囲気は、山の学校のブログにある写真をぜひご覧ください。





A クラスでは、『百人一首』の暗唱をしています。また書く方の取り組みでは、「俳句かるた」を自作しています。

俳句や百人一首はもとより日本固有の古典であり、その価値は周知の通りです。ですが生徒たちの言葉もまた「彼らにとって」固有の古典となりえます。それは特別なものであり、彼らの人生の一部分です。そのような言葉を、彼らが自分で書き残してくれることに寄り添い、また捨ておかれた部分にも代わりにそうしておくことが、私の役目だと思っています。とりもなおさず、私自身そうしてもらった経験があります。そして今に至り、その「バックアップ」という事実を大事に思えばこそ、今度は自分がそれをする番だと思っています。

古典は、思い出すたびに何度でも力が湧いてくる言葉です。大事に思い出した分だけ、その部分がまた前よりも付け加わって大事になっていきます。言葉を慈しむことは、子供を慈しむこととも通じているのではないのでしょうか。

本読みでは、憶えてほしい心象風景に、日本のあちこちの昔話を取り上げています。「私が知っている話はこうだった」と、その多様性がまた新しい興味を惹いてくれることを期待しています。

ところで、これは『しょうとのおにたいじ』（稲田和子著、福音館書店）という、さるかに合戦に似た話を読んでいる時でした。ふとこのクラスに生徒を預けて下さっているお母さんの気持ちに、思いをはせた刹那がありました。それで自然と思いつかんだことですが、このクラスでは、「親子の情」というモチーフを選ぼうと思いました。そしてまた、そのように思い起こさせた生徒たちの顔を「もっと見ながら話したい」と思ったので、最近では『素話』を始めました。

素話には、話の内容を仕込んでおいてから臨むのですが、いざ生徒たちの顔を見ながら話し出すと、何かこちらに「こう話してほしい」というような要求を感じ取ることがあります。それで筋は変わらないにせよ、自然と細部において変わっていくことがあります。そして、これも多様性の一つなのだと思います。それが、本を伏せたことによる発見でした。そのように手を加えながら、一期一会の生徒たちとの時間をより濃やかなものにしていきたいと考えています。

一方のBクラスでは、4人の元気な男の子たちと一緒に、『孫子の兵法』を暗唱しています。前に出てきてもらって、詰まらずに言えたら「合格」というのは、私が小学生の頃に国語の時間によくさせられたことですが、今はそれを私がしている番になります。

しっかりと憶えたものは堂々と言えるようになり、あとは減ることのない自信となります。それは私自身もそうでしたが、これからの生徒たちを、いざという時には「ぼくにはこれがあるんだ」と支えてくれることでしょうか。「ぼくこんなん言えるんやで!」「じゃあ、これはどうかな?」「すごいやろ?」「おお、すごいな!」と、あたかも言葉を使ったキャッチボールのように感じています。暗唱すると、自分をますます肯定できるようになります。おそらくそれは学び全般の吸収力を上げることであるでしょう。

本読みや素話では、鬼や竜や巨人を退治するようなモチーフを好んで選んでいます。たとえば日本のものからは、『酒呑童子』や『地獄絵図』の話を、西洋のものからは『心臓を持たない巨人』や『ジュープリトの竜退治』などを話しました。物語の中の英雄になりきって、「ぼくやったらこうする!」と、怖い気持ち半分、勝つ気持ち半分で聞いてくれています。生徒たちが私の中から話を引き出してきている部分も多々感じられます。

このクラスの1年生たちは、とにかく元気があります。そこで最近では『推理クイズ』というものをしています。これは、「はい」か「いいえ」で答えられるような質問を生徒たちからしてもらって、答

となるシチュエーションを探り当ててもらおうという形式のものです。質問をしてくれないのではないかと  
という心配は、どうやら杞憂だったようです。言いたくて仕方がないことをどんどん言い合う、そんな  
活気があります。それなので、彼らのポテンシャルを引き出すというよりは、もともとあるそれを大人  
のせいで潰してしまわないように心がけていきたいと思っています。

## 『ことば』(3~4年) 『かず』(3~4年) 『高校数学』 担当 浅野直樹

やるべきことをきっちりとやれば進歩が実感できるという観点からそれぞれのクラスを振り返りま  
す。

ことばクラスでは数年前に自分たちで作った俳句カルタをしようとしたときに、明白な誤記を発見し  
て「これは1年生のときに作ったものだから」という声が聞かれました。これは進歩の証です。過去の  
自分は誰にとっても目標を設定する際の適切な参照点になります。他人や平均と比べると必然的に目標  
を達成できない人が出てきますし努力など途中の過程を無視して残酷に勝敗が決定されます。私は昔陸  
上部で短距離をしていたのでそのことが身にしみてわかります。速い人はとにかく速いのでどれだけ練  
習してもまず勝てません。それでも陸上を続けることができたのは自己ベストを目標にしていたからで  
す。

かずクラスでは冒頭に間違い探しと迷路をするというスタイルがすっかり定着いたしました。それに  
伴い攻略法も確立されつつあります。間違い探しではそのパターンが限られています。列挙すると、何  
かが片方にはあってもう片方にはない、あるものの大きさが違う、色が違う、文字が異なる、位置がず  
れている、です。迷路は特殊なルール付きのものを多用しておりますが、ゴールからたどれる場合はゴール  
からたどってみる、必ず通る道を確定させる、通ってはいけない道と通れるとうれしい道に分けて前  
者を避けて後者を目指すといった方策が有効です。

高校数学もこの延長線上にあります。因数分解は共通因数でくくる、たすきがけを含む2乗の公式、  
3乗の公式、1つの文字について整理する、置き換え、うまく組み合わせる、都合がよいものを足して  
引く、で攻略法は網羅されています。2次関数はグラフをかけば視覚的に理解できる点も含めて迷路に  
似ており、ゴールとなるような形から逆にたどることもしますし、最大・最小の問題ではなっほしく  
ない形となっほしい形との境目を探ることになります。さすがにこれら高校数学となると複雑ですが、  
中学数学からきちんと理解していけば無理なく到達できます。

上で述べたような進歩を実感するためにも、日々やるべきことはやるということを実践していきたい  
です。

## 『ことば』(5~6年) 担当 梁川健哲

ことばクラスは今学期、初めて担当させて頂くこととなりました。6年生Iちゃん、S君、5年生H  
君の3人と過ごしています。どの生徒さんとも顔なじみでしたが、特にH君とはクラスで直に接するの  
は初めてでしたし、3人と初めて出会うような気持ちで、初回クラスは自己紹介の作文からはじまりま  
した。ピアノが何より大好きで、人を助けたり元気にさせる仕事をしたいというIちゃん。詩作や、漢  
字を読むことが得意で、保育士になりたいS君。スポーツが得意で、将来の夢はロボットクリエイター  
か料理人というH君。3人とも堂々と作文を発表し、自然と拍手が湧き起こる、印象的なスタートとな  
りました。



息を吸って、吐くように、言葉を介した入出力を行う時間。クラスを漠然とそのように捉えています。私なりに最初に考えたことは、山の学校の自然豊かな環境を最大限に活かし、体を使うことです。何だか「しぜん」クラスや「かいが」クラスの話のようですが、「ことば」にもすんなりと当て嵌める気がします。じっと椅子に座っている時と、青空の下歩き回っている時、森のなかに佇んでいる時とでは、吸い込むもの、吐き出すものの質が変わってくるはず。そうした違いを無意識にでも感じられたら、考えたり、あらわしたりすることの楽しさや、奥行きが広がるのではないかと思います。

実は、既にほぼ3人ともが俳句づくりを通して、そのことを体験的に知っています。実際、春の園庭を歩き回りながら、3人から言葉が溢れてくることに感心しました。その他の取組としては、例えばある時は「へそ」（谷川俊太郎）という詩を読んでおいて、外で腹式呼吸を試してみたり（これには伝えたいことにまだ続きがあります）、ざわざわと風の吹く森の中で、森の奥が舞台となる「注文の多い料理店」（宮沢賢治）や、時空を超えて色々な音が聞こえてくるような「みみをすます」（谷川俊太郎）という詩を皆で朗読してみたりしました。『吾輩は猫である』（夏目漱石）を導入に用いたあと、人ではない何か（もの／いきもの）に成りきって作文してみる、ということもしました。いきなり作文というのは少々難しかったようで、男の子二人は園庭で考えを巡らせたり、私とあれこれ話し合ったりしているうちに、その日は終了時間が来てしまいましたが、二人とも既に俳句の形でそのことを実践してくれていたのだということ、後になって伝えました。Iちゃんは、想い入れの強い「ピアノ」目線で、弾き手の少女（自分自身）との歩みを綴る力強い文章を書き始めてくれています。

3人の波長のようなものを手探りで感じながら、暫くは色々なものを散りばめたクラスが続くと思いますが、表現することにおいては、詩や作文、物語作りなど、何かそれぞれにぴったりとくるものに突き進んでもらえるよう、導きたいです。

また、1年間かけて、長編小説を読むという取り組みも、継続していきます。これには『光車よ、まわれ!』（天沢退二郎）をひとまず選ばせていただきました。冒頭からちょっぴり怖くてドキドキする話ですが、主人公は同じ小学校高学年の少年少女です。読み始めた日、第一章を、クラス終了までかけて読みきってしまいました。次回、第二章を読み進めながら、このまま冒険を続けるか、引き返すかを皆さんに訊ねたいと思います。

## 『かず』（1～2年 A・B）『かず』（5～6年）

担当 福西亮馬

### 『中学数学』

1～2年生のクラスでは、自然と計算が好きになってもらうことが目的です。そして算数全体にも興味を持てるような導入の工夫をしています。たとえば、数（自然数）の「大きさ」に対する感覚を磨く取り組みとして、『COP IT（コピット）』という遊びをしました。また、サイコロを使ったすごろくや数当てゲームをよくしました。

5や10や15という数の並びは、どれぐらいの刻みに置かれた数なのか。100や200という数は、10や20を意識していた時と違って、どれぐらいの大きさで認識すればいいのか。また「6に5を足すと、10から1はみ出す」という、頭の中で生じるあの何とも言えない——「数の感覚」としか言えないような回路を鍛えることを、その都度大事にしてきました。

5～6年生のクラスでは、一度これまでの内容を振り返って、1年生、2年生、3年生、4年生と、順番にドリルで「復習」に取り組んでいます。どこまでが楽勝で、どこからが曖昧になって来るのか、いわばウィルス・チェックのフル・スキャンをかけることをしています。特に、繰り返しの少ない「文

章題」と、忘れかけている「幾何」とが課題です。そうして、積み残しのない、一貫した勝ち癖をもって、次の学年に上がってほしいと考えています。

また「論理」の取り組みでは、それぞれの学齢に応じた「パズル」に取り組んでいます。低学年では、『足し算パズル』と『ナンプレ』をよくしました。また高学年では『algo』をしています。「理詰めで考えること＝それ自体が楽しい」ということは、今はまだテストの点数にはさほど目に見えて現れてくる部分ではありませんが、その後の数学での取り組みを積極的に迎える上では重要です。よく聞かれるのは、「小学校で算数は得意だったけれど、中学校で数学になってからは苦手になった」という声があります。それを見越した上で、一朝一夕では変わらないところでの日頃の積み重ねを行っています。

中学数学のクラスは、これまで学校で習ったことをきっちりと押さえて、過不足なく自信をつけてもらうことを目的にしています。以前、春期講習でしたことの延長で、時間の許す限り、復習のためのプリントを解いてもらっています。ほとんどのプリントが満点なのですが、時に、勘違いして覚えていたり、計算間違いに陥りやすい方法を探っていたりします。そのような「はてな」の分かれ道がどこにあるのかを、その都度、迷路のようにして解きほぐしながら、正しい道に至ります。地味ですが、それが一番嬉しい収穫です。さすが中学生ともなると、分からないことをなおざりにせずに質問してくれます。それもまた嬉しいです。

時に、その質問の内容から、生徒たちの興味のあるような数学的な事柄を拾って、それに触れることもあります。春学期では、多項式の「次数」の質問から、ふと空間の「次元」との違いの話になり、「正8胞体」という4次元のサイコロを描いたことがありました。これは、普通の2つのサイコロを用意し、その面と面をそれぞれ貼り合せて作るのですが、その点や面を普通には数えることができません。しかし数学では、きちんとそれを「数える」ことができます。それを計算とアナロジーを使って実感してもらいました。そこから派生し、「メビウスの帯」や「クラインの壺」を作った時もありました。また最近では、整数問題に対する質問から、「ユークリッドの互除法」を紹介しました。

学校ではどうしても単元別に習うことが主な時間の使い方となります。そこで、単元と単元がどのようにつながっているのかという、より体系的な視点からも眺め、「モヤモヤ」が晴れるようなお手伝いのできればと考えています。

『中学英語』（1～2年 /3年）『高校英語』（2～3年）

『英語文法』『英語講読』（『ハリー・ポッター』 / 『カズオ・イングロ』）

担当 浅野直樹

今学期はたくさんの英語クラスを担当させていただいております。どのクラスも英語を楽しく学ぶ雰囲気です。英語を楽しく学ぶ秘訣を探りながら、各クラスを振り返ってみたいと思います。

それぞれの能力や興味に応じた内容であることが第一に挙げられます。『ハリー・ポッター』とカズオ・イングロ『日の名残り』を読んでいる講読クラスはまさに読む内容がクラスそのものを規定しています。どちらも日本語訳が存在しますが、誤訳かほとんど翻訳には限界があるので、原文を読むほうがより楽しめます。Knight Busが「騎士バス」と「夜のバス」をかけていることや、執事の偉大さ（greatness）とは何かを問う際に Great Britain という呼称が念頭に置かれていることなどは原文を読むと自然に頭の中に入ってきます。先学期の『自由論』を原文で読まれた受講生の声（<http://www.kitashirakawa.jp/yama-no-gakko/?p=3295>）もよろしければご参照ください。

このように原文を読めるようになるまでには当然ながらそれなりの訓練を要します。大人になってから英語を学び直したいということであれば必要に応じた学び方をすることができます。英語で意思疎通を図れるようになりたいということであれば文法のための文法問題や文語的な表現は気にせず基本的な



構造の文を習得できるように励めばよいですし、ある特定の文章を読めるようになりたいのであればそこで用いられる単語や構文を重点的に練習することもできます。入試のために点数化する必要がないので、同じような内容を表すのにいろいろな英文を考えたり、その考えた英文の微妙なニュアンスの違いに注目したりすることもできます。

中学生は学校独自の進み方をするでしょうから、その進度に合わせた課題を用意しています。それに加えてどうすればよりよく理解できるかを日々追求しています。例えば熟語を覚える課題では前置詞の持つ中核的なイメージから意味を類推したり、新しい単語をすでに知っているカタカナ語と関連付けたりといった具合です。

英語を楽しく学ぶための参考になれば幸いです。

## 『中学英語』（1年）『高校英語』（1年） 担当 吉川弘晃

山の学校の講師を始めて2年目になります本年度は高校英語と中学1年英語の2クラスを担当しております。高校英語の方は高校1年生の生徒さんを担当しておりますが、最初の1ヶ月はまずは学校の授業に慣れてもらうことを最優先し、教室では高校の学習の予習や復習を中心に行っております。

高校レベルの英語学習で最も重要になるのが語彙力の強化です。日本の英語教育では中学レベルで扱う単語が約1500語であるのに対して、高校レベルのそれは約3000語です。つまり同じ3年間で高校生は中学生よりも2倍の量の単語を覚えなくてはなりません。当然ながら高校英語では中学では習わなかった新たな英文法も習得する必要があります。

従ってこのクラスでは、語彙力を全身を使って強化することを重視した学習を行うつもりです。高校の単語テストでは満点を目指すだけでなく、暗記する単語はどの前置詞と一緒に使われるか、(動詞であれば)自動詞か他動詞か、(形容詞であれば)対義語は何か、といった点にまで気を配りながら、とにかく自分で声を出して、紙に書いて、時には身体を動かしながら単語暗記を行います。耳で聞くのも暗記の重要なステップなのでリスニング問題なども用意しております。

さて、中学英語についてですが、中学1年生であれば人生で初めて英語に触れる人がほとんどでしょう。このクラスでは英語の綴りと発音の関係に注意した学習を行っています。例えば日本人が苦手な「ア」の音です。appleのaの音は日本語の「あ」というよりは「え」に極めて近い「ア」の音であるのに対して、uncleのuの音は日本語の「あ」に近い音です。前者のaを発音する時には口を思いっきり開けて発音する必要がありますが、日本語の会話ではそこまで口を大きく開けるような音は出てこないのです。しっかり練習の機会を作る必要があるというわけです。

従ってこのクラスでは、教科書に登場する単語の1つひとつに注意して、それらの発音やアクセントを生徒さんと一緒に何度も練習します。また教科書に出てくる文章を実際に音読する学習も忘れておりません。中学のうちは意味の切れ目で文を切りながら読む習慣をつけることを大事にしていこうと思います。

## 『ユークリッド幾何』 担当 福西亮馬

前学期に引き続き、ユークリッド『原論』第3巻の内容を証明しています。今学期は、命題3.10～22までを、飛び飛びながら証明しました。ここまでで第3巻の2/3にあたります。そしてその中には一つの山場として命題3.21がありました。有名な「円周角の定理」です。その証明の仕方を学校の黒

板で見て「書き写す」のでなくて、自分の力で証明してもらったことには、意義があったのではないかと思います。また生徒の R 君はそれを 2 通りの方法で示してくれました。

さて、第 3 巻は「円」がテーマです。円（周）とは、ユークリッド幾何における定義では、1 点（中心）から等距離（半径の長さ）にある点の集まりのことです。つまり、中心と半径という二つの情報だけで一意に決まります。逆に、中心と半径が同じならば、その円は同一視してよいことになります。

そこで R 君には、命題でもし円が与えられたなら、すぐにその「中心」を描き入れることが第一のポイントになる、ということをお伝えしました。そして中心を描き入れることは、すなわち、中心から円周に向かっての「半径を描き入れる」ことでもあります。そしてもしそれが 2 本あれば、半径が等しいことから、「二等辺三角形」が見えてきます。円を扱った命題の証明は、たいていはこの二等辺三角形（とその底角が等しいこと）が鍵となっています。こうした一連の手続きは、あたかもスポーツのフォームのようなものです。それがだんだんと無意識にできるようになってきた頃には、おそらく幾何も得意に感じられるようになってきた頃でしょう。R 君は今その練習をしてくれています。

また一方で、R 君は、図の中のそれぞれの点や角に、自分で「名前を与える」ということについて、ずいぶん慣れてきました。以前はこちらが「ここを点 A と名付けてみよう」と促していましたが、最近では何も言わなくても自分からそれをするようになってきています。一步一步の進みだと思えます。この「名付ける」ということは、一見当たり前に思えますし、また数学的な要素ではないようにも思えますが、実は「定義を置く」という大事な力が問われています。その有無が、証明できるかどうかを分けている場合も多々あります。そして名付けるためには、ある程度先を見通すことも重要です。そこでうまく工夫がなされていれば、あとで補助線を見つけることや、立てた式の整理もまた容易になってきます。

以上のようなことをコツコツと練習しながら、R 君には引き続きその成果に胸を張ってもらえればと思います。

さて、第 3 巻の最後の山場は、何と言っても、命題 3.35 にある「方べきの定理」です。そこまで登りきることができれば、一つまた大きな達成感が味わえることでしょう。R 君は去年に第 1 巻を読み終え、「三平方の定理」とその「逆」の証明を成し遂げました。その時のことを思い出しながら、今も新しい峰に挑戦しています。

## 『ロボット工作』

担当 福西 亮馬

今学期は、新しく中学 1 年生を 1 人クラスに迎え、中学 3 年生の R 君と 2 人で取り組んでいます。R 君の方は引き続き、これまでに自作したロボット・カーの改造をしています。そして今回、仕様を考えてくれました。「小型カメラを取り付けて、無線による操縦で外を走らせたい」というものです。今はその仕様を実現することに取り組んでいます。

もう一人の中学 1 年生の M ちゃんは、「動く物がけっこう好き」とのことです。そこで、ロボット工作の入門として、「ミュウロボ」を使って取り組んでいます。まずはハード面です。キャタピラを使った足回りの組み立てに多少苦戦しましたが、その分、自分の思うデザインに仕上がったことが一つの満足のいく成果でした。一方、ソフト面では、「前進」や「後退」、「時間指定」による制御といった、簡単なプログラムを書くことから入っています。最近ではセンサーにフォト・リフレクタを取り付け、ライントレースに挑戦しようとしています。そこで for 文や if 文を使ったプログラムを紹介し、ハード・ソフト両面で次第にロボットを成長させて行くことができればと考えています。





さて、これはR君との思い出です。この間、夜の帰り道に、ロボットのリモコンに使っている無線機の親機と子機を、R君と私とで持ち、信号の飛距離を実際に試したことがありました。山の石段では木々が遮蔽物となってすぐに電波が途切れてしまいましたが、山の下の道路では、直線距離で150mほど届きました。(地理が思い浮かぶ方は、山田町へ曲がる道の手前から、御蔭通りの交差点を渡った所までです)。

送信ボタンを押すと、相手側の受信LEDが光ります。お互いに2回光ったら、2回押して合図を返すというように、あらかじめ決めておきました。そして夜道を一步步離れて行きました。手元のLEDが光り、次に、向こう側でも光るのが目視できました。暗闇に灯る小さな点が、実に頼もしく感じられました。またそれと同じくらい、途中から「あっ」と信号が途切れて、応答しなくなった瞬間が、とても惜しく感じられ

ました。そのような実験をしながら、夜の路上を30分ぐらい行きつ戻りつをしていたと思います。

そのようなことが、またいつかR君の方でも思い出の断片となってくれていたならば、その時の私には思われたのでした。

## 『山の学校ゼミ (数学)』

担当 福西亮馬

このクラスでは、『虚数の情緒』(吉田武著、東海大学出版会)をテキストにしています。この原稿を書いている時点では、410ページの1次方程式や2次方程式のあたりまで進んでいます。

1次方程式は、 $ax+b=0$ を解くと $x=-b/a$ という有理数(分数)の形が現れます。つまり有理数の世界と密接な関係があります。そして2次方程式は、一番簡単な形である $x^2=a$ にでき、必然的に平方根が登場します。すなわちそこに無理数の世界への扉が開いていることになります。そして有理数に、無理数という視点が加わって、実数の連続性という概念、または直線の「つながっている」という幾何学的イメージがはじめて獲得されることになります。

さて、『虚数の情緒』の404ページにある、円周率を求める漸化式を、パソコンで計算させたところ、途中から出てきた値が0、0、0…となり、「あれ!？」となったことがありました。すなわち、本に書いてある通りの「桁落ち」が生じたのです。お恥ずかしながら、私はその時「計算機に計算させているのだから大丈夫」という意識がありました。絵に描いたように典型的な過ちをおかしていたのです。そこで、「それがまさしく『桁落ち』なのではないですか？」と指摘して下さったのが、受講生のMさんでした。それで、「なるほど!これがその、『それ』だったのですね」と、改めて腑に落ちたのでした。

そこで、これもまた本に書いてある通りに、「分子の有理化」という工夫を施しました。有理化は、ふつうは分「母」に対して行うものなのですが、時には分「子」に使っても意味があるのだという、いわば守破離の「破」のテクニックです。それによって、ほんの少し漸化式を書き直した結果、実際に、その式のはじき出す円周率の近似値が、だんだんと精度良く求められることが確かめられたのでした。計算機の誤差について、一つまた得心できた経緯でした。

『虚数の情緒』は、この後502ページから、本の題名と同名の節に入ります。虚数(複素数)の登場です。そしていよいよ真打ち、「オイラーの公式」が登場します。以前の山びこ通信でも、「そこまで一里塚を見ながら頑張らしましょう」というように書いたことがありますが、ぜひそこまでお付き合いいただけると嬉しいです。また、同書の584ページにある図表『「オイラーの公式」の立体表現』は、いわゆる「形相悦」に浸ることができ、一見の価値あります。

前学期の途中から生徒数が三名から四名になったこの授業ですが、特に何の支障もなく最初からこのメンバーで集まっていたかのようなアットホームな感覚で、今年度も楽しく勉強させて頂いております。むしろ参加者が増えたことによって、より活発なディスカッションができるようになり、嬉しい限りです。

開講当初からこの授業は、グローバルな政治・経済・社会関連のニュースを取り上げて解説する時間と、課題図書を指定して講読する時間の二本立てで行っています。今年は当初、「フラジャイル・ファイブ」と呼ばれる通貨の脆弱性が懸念される新興五カ国のいくつかで大きな選挙が行われるという話題が大きな注目を集めてきました。しかし実際に蓋を開けてみると、ウクライナ情勢の緊迫化や EU 議会選における反 EU 勢力の躍進、タイでの軍事クーデターなど、それ以外の国や地域でも様々な問題が噴出しており、ここ日本に関しても、アメリカとの TPP 交渉が想像以上に難航するなど、高見の見物では済まされない状況となっています。世界情勢というものは元々そういうものだと言えばそれまでなのですが、いくら何でも近年の混迷ぶりはかなり新しい事態なのではないでしょうか。

ところで、日本の新聞やテレビのニュースを普段ぼんやり眺めているだけだと、どうして日本と地理的距離や関係性の近い中国や韓国の話題ばかりが目飛び込んできます。それも、いわゆる「紋切り型」の論調が目立ちます。そうした意見が必ずしも間違っているという訳ではありません。ただ、一つのニュースを見る場合であっても、様々な角度から事象を捉えて検証する意識は大事だと思うのです。そのため、授業でニュース解説をする時には、「わかりやすい図式」ももちろん提示しつつ、「ややこしくする視点」もできるだけおろ交ぜていくように心がけています。

例えば、あるニュースに関して生徒のお一人が「これは簡単にいうと民族対立が原因なんですよ」と質問されて、しかも実際にその通りだということがあるとします。その場合は、皆さんでその国の民族問題について詳しく学んだ上で、民族対立という図式に容易に隠されてしまう他の要因、経済格差の問題やもしくはその国固有の歴史的文脈などにも多く触れるよう注意を払っています。つまり、「簡単にいうと」を逆なでする努力をしているのです。

この授業は「大人の社会科」を目指していますが、それは扱う内容についてだけではなく、学び方もまた大人であることを目指しているということです。学びの中で、敢えて迷う。敢えてわからなくなる。知識も経験もある成熟した方々が、問題意識はきちんと持ちながら、答えを急がずに広大な知の庭園を逍遥する。ぶらぶらと連れだって歩きながら、ああでもない、こうでもないと話し合う。そんなイメージを大切に、今後も皆さんと豊かな時間を共有させて頂こうと思っています。

山の学校ゼミ（経済）は今年の4月から新しく始まったクラスです。元々は3年ほど前に「経済学入門」という授業を私が担当させていただいていたのですが、現在ではそのクラスは「山の学校ゼミ（社会）」という名前に変わり、中島先生に引き継いでいただいております。私がこの4月からまた講師として復帰し、新たにこの「山の学校ゼミ（経済）」という授業を担当させていただくことになりました。よろしくお願ひします。

このクラスでは、経済関連の時事ニュース解説とアダム・スミス『国富論』の講読を行っていく予定です。時事ニュース解説では、毎週私がその一週間にあった経済ニュース関連の新聞記事をコピーしてきて、それを受講者の方と一緒に読みながら、適宜解説を加えています。一方的にこちらが講師役になっ



て教えるというのではなく、双方向的に受講者の方と議論をしながら、授業を進めていければと考えています。実際に、受講者の方のほうが現実経済の動きなどにお詳しく、こちら側がいろいろと教えていただく機会も多いです。

4・5月の授業では、消費税増税の影響や、大手企業の賃上げのニュース、外食産業での人出不足のニュース、日本のものづくり企業の生き残り戦術、タイのクーデターなどの話題を取り上げました。いずれも受講者の方と議論をするなかで、意外な方向へと議論が転がっていったのが面白かったです。できるだけ池上彰さんのようにわかりやすいニュース解説を目指しているのですが、受講者の方の関心や知識が思いのほか深いところにあり、なかなかディープな方向へと議論が進んでいくことが多かったです。私自身、現実経済の細かい動きなどはフォローできていないところもあるのですが、思想史や社会学などの知識を使って、できるだけ大きな視点から経済・社会・歴史の流れを説明するように心がけています。

アダム・スミスの『国富論』は言わずと知れた経済学の古典ですが、いま読んでみてもいろいろと新鮮な発見があり、興味深いです。『国富論』の第1章は分業の話から始まり、有名なピン工場の例が出てきます。近代以前には職人たちがピン製作のすべての作業をひとりで担当していたけれども、近代になって産業が発達してくると、ピン製作のそれぞれの工程を複数の人で分担して作業をするようになる。するとひとりの職人では一日に数百本程度のピンしか生産できなかったものが、ピン工場ではひとりの作業員あたり一日に数千本レベルでのピンが生産できるようになる。これが近代社会で生産力が向上する大きな要因であり、文明が発達する重要な原動力のひとつなのだ、とスミスは言います。このように「労働の発達」に文明社会の進歩の原動力を見る、というのが『国富論』の基本姿勢であり、個人的にも関心を惹かれるところです。

山の学校ゼミ（経済）は現在のところ、受講者の方が一人と少し寂しい状況なので、まだまだ受講者を募集しております。途中参加も歓迎ですし、経済について全く知識がない方も、経済についていろいろ議論したいという方も歓迎です。申込みお待ちしております。

## 『イタリア語講読』

担当 柱本 元彦

前回に引きつづき3名でダンテの『新生』を読んでいます。イタリアのものでも邦訳があれば邦訳で済ませてしまうことが多いのですが、ダンテなどは、『神曲』はもちろんですが、『新生』もやはり原文で読まなければ面白くないのだなあと痛感しています。つまり恥ずかしながら今まで原文は読まずに邦訳だけ見て、なんだかんだ言ってもそれほど面白い作品ではないと（「歌物語という形式が好きだ」などと自分では言うくせに）思っていたのです。1回に1～2ページほどのペースですが、進む速度は遅くても満足度は大きい。いや今回一番満足しているのはわたし自身でありまして、ダンテの文章がいかにはしばしばラテン語的であるか、古典語の広川先生から毎回のよう指摘があり、なるほどそうであったかと、まさに目から鱗が落ちる思いの連続です。なかにはダンテ自身の語学的過ちすらありました。いやおそらくラテン語風に修正しようとした校訂者の不注意でしょう。周知のようにダンテ自身の原稿は『神曲』であれ『新生』であれ現存していません。『新生』ではバルビの校訂した版が定番となり伝統的に用いられてきました。けれどイタリアでは近年この状況も変わりつつあります。こうした変化の立役者だったゴルニャッラーイも参照しながら（まさに広川先生なしには考えられません）、この注釈ではこう書いてある、あちらの注釈ではこう、また別の人は云々と・・・ああこれが妥当でしょうね、とはならない場合もあります。詩の韻律形式に立ち止まるときもあります。こんな風にひとつのテキストを前にいろいろと話し合いながらの読書・・・まるで学生時代の読書会ですが、考えてみれば贅沢な時間ですね。

今期からのフランス語講読の授業では、ルネ・デカルトの『方法序説』（1637）をテキストにしています。デカルトの『方法序説』といえば、言わずと知れた哲学の古典ですが、これを授業のテキストとして選んだのにはいくつか理由があります。まず歴史的な古典であること。次に、一般の語学講座ではあまりとりあげられないテキストであろうこと。そして講師である私自身がある程度解説できる内容であること。これらの理由はどれも「山の学校」という場所で、私が講義をするということに関わっています。京都には山の学校のすぐ近くにあるアンスティチュ・フランセをはじめとしてフランス語を教える学校がいくつかあります。したがって、他の語学学校ではできないようなことがいいたらうと思いましたが、教養を重視する山の学校ですから、扱うテキストは古典がいいたらうと思いました。また私自身が哲学史を勉強してきたこともあり、それを生かせるものになりたいという考えもありました。こうしたことから自然と浮かんできたのが『方法序説』でした。

『方法序説』は当時のヨーロッパには珍しく、フランス語によって書かれた書物です。当時の学問的な書物は全て公用語であるラテン語によって書かれていましたが、デカルトはラテン語の読めない女性や子供にも読めるようにと本書をフランス語で書いています。その背景には、理性は万人に等しく備わっているというデカルト自身の思想があるのですが、そのおかげでさほどの予備知識がなくても読めるようになっており、これが『方法序説』が初めて読む哲学書として薦められる理由でもあります。

授業は現在、読み進む速度に応じて二つに分かれています。どちらの授業においてもやっていることに変わりはありません。それは徹底して「読む」ということです。本を読むということ、とりわけ哲学書を読むという行為は、その著者の思考の跡をたどる行為でもあります。ひとつひとつの文章や段落がなぜここにあるのか、なにを言わんとしているのか、それを丁寧に追いつきながら読んでいきます。デカルトの文章は現代の目から見ると一文が長かったり、接続法が多用されていたりと読みにくい部分もありますが、慣れてくると無駄のない明晰な文章であることがわかってきます。ここにも「明晰判明」を旨としたデカルトの思想があらわれていると言うべきでしょうか。

そのデカルトは、今期読んだ箇所では本を読むことは著者との会話のようなものだと書いています。この意味で、この授業はデカルトとの会話ということになるでしょう。しかしデカルトは一方で、過去の書物ばかり読んでいて今の時代に起きていることが分からなくなってしまうとも言っています。ヨーロッパの古典を読んでいると時代や文化の違いはいやが応にも意識されざるを得ないという面がありますが、むしろその差を意識しつつ、そこからなにを引き出すことができるのか、それを考えながら読み進めていきたいと思えます。それもまた古典を読む意味であり、単なる知識とは違う教養のひとつのあり方ではないでしょうか。

今学期の当クラスでは、『エヴゲーニイ・オネーギン』と並んで、プーシキンの代表作として名高い『青銅の騎士』に取り組んでおります。受講生は引き続き T さんお一方です。プロのロシア人の朗読した資料を活用しながら、その音声的な美を鑑賞した後で文法的な読解を行い、合わせて脚韻のみならず、アソナンスや子音反復、行き場のないネワ川の水の流れが効果的に表現されている交差配列法など、個々の詩的技法にも目を配り、プーシキンの意図する詩的世界を可能な限り総合的に味わうよう努力いたしております。

「汝を我は愛す、ピョートルの造りしものよ」——一点の曇りもない描写を通して序で高らかに歌い上

げられる、ピョートル大帝の誇り高い姿とその言葉、さらに彼の創造した都ペテルブルク。大帝の姿には、かつてプーシキン自身が抒情詩『詩人』で自らの分身として描いた詩行が重なり合い、いま一人の主人公の名は、彼が長年に渡って心血を注いで作り上げた、冒頭に挙げた作品名にもなっている人物と同一のものであります。この作品では、言わば二人のプーシキンが鋭く分裂し、対立する形で描かれているという読みも可能となるでしょう。

それと同時に、文字通り偶像と化した「青銅の騎士」ピョートル大帝と、小さな幸せを夢見ながらも、未曾有の洪水に翻弄され「哀れな狂人」へと変ずるエヴゲーニイとの対比によって、現在にまで及ぶロシアの避けられぬ運命が、さらには国家対個人、また自然の持つ原初の力と、それを無理に抑え込もうとする行為の危うさなど、古今東西を通して絶えず繰り返される様々な普遍的テーマが、その古典的な均整美を通して我々の目の前で展開されているのです。

前学期まで比較的小規模な抒情詩を主に読み続けてきましたので、Tさんにとっては初めての「大作」の講読となりましたが、綿密な予習には幾分かの余裕も加わり、予定通り今学期中には通読できそうです。この調子でロシア語やロシア文学に親しんでいただければと願っております。

## 『ラテン語初級文法』 『ラテン語初級講読』(A・B・C) 担当 山下大吾

今学期から、次学期までの2学期制の予定で初級文法クラスが新たに開講されております。受講生は現在Aさんお一方、大学でドイツ語の初歩を学びながら学習に勤んでおられます。共にいわゆる印欧諸語に属する言語ですので、格の諸機能など、性格の重なる点を参考にして(但し文法表の諸形態は重ならないように!)、楽しく学んでいただければと期待しております。

講読クラスでは前学期と変わらず、A、Cクラスではキケロー、Bクラスではホラーティウスに取り組んでおります。それぞれホラーティウス(『詩論』147-148.)の述べる、ホメーロスの叙事詩技法 *in medias res* 「事件の核心へ」とは相反する形で、*ab ovo* 「卵から」に従って、つまり作品の冒頭からじっくりと読み進めておりますが、これは講読の有効な一手法としてホラーティウスも認めてくれるのではと考えております。そういえば *ab ovo* はプーシキンもある韻文作品で引用している語句でした。

Aクラスでの『老年について』では59節に入り、振り返れば既に全体の3分の2ほどを読み終えたこととなります。受講生のHさん、Aさんお二方も、単にラテン語の読解という側面のみならず、今までに読み進めてきた他のキケローの作品、特に『友情について』で得られた読書体験の生かされる機会が次第に多くなっているのではと思われます。

Cクラスではその『友情について』を前学期に引き続いて読み進めております。受講生はCiさんお一方です。10節で見られる、小スキーピオーの死に直面し、悲しみ打ちひしがれる自らの立場を認めつつも、そのような行為は結局友人を愛するものではなく、自分を愛するもの、言わばナルシストのする行為に他ならないのだという趣旨のラエリウスの言葉をラテン語原典で読まれた際、感嘆の声を漏らされたCiさんの表情が今でも印象に残っております。それはヨーロッパの教養教育に対する礼賛の言葉にもなっていました。

Bクラスでは前学期中に『詩論』を無事読了し、その後読み進めてきたアウグストゥス宛て書簡(『書簡詩』2.1.)もまもなく読了の予定です。受講生のCaさん、Mさんお二方も、ヘクサメトロスの韻律や、散文に比べれば多少複雑な語順など、韻文ならではの事情にも大分馴染まれてきたようです。先代の喜劇作家プラウトゥスに対する否定的な評価など、文学史的に見て興味深い側面のみならず、*Graecia capta* 「捕らわれたギリシア」の一節(『書簡詩』2.1.156-)を初めとして、印象深い名句をラテン語原典で味わえる週末のひと時は一際活気に満ち、充実した時間が流れております。引き続きフロールス宛て書簡(『書簡詩』2.2.)に取り組む予定です。



ラテン語初級

テキスト：Hans H. Ørberg, *Lingua Latina I: Familia Romana*, Grenaa: Domus Latina, 1991.

6月11日現在、Capitulum XVの途中まで終了。

ラテン語中級

テキスト：Hans H. Ørberg, *Lingua Latina II: Roma aeterna*, Grenaa: Domus Latina, 1990.

6月11日現在、Capitulum LIIの途中まで終了。

ラテン語中級講読：中世ラテン語劇講読

テキスト：Peter Dronke, *Nine Medieval Latin Plays*, Cambridge UP, 1994. (Cambridge Medieval Classics)

6月11日現在、*Sponsus* と *Officium stelle* を読み終え、*Ludus de passione* を 152 行まで読了。

『ギリシャ語初級講読』(A・B・C)

『ギリシャ語中級講読』 『新約ギリシャ語初級』

担当 広川直幸

ギリシャ語初級講読A：ソポクレス『オイディプース王』講読

テキスト：H. Lloyd-Jones, N. G. Wilson (edd.), *Sophocles Fabulae*, Oxford UP, 1990. (OCT)

註釈：R. C. Jebb, *Sophocles: The Plays and Fragments, Part I: The Oedipus Tyrannus*, Cambridge UP, 1893<sup>3</sup>.

R. D. Dawe, *Sophocles: Oedipus Rex, Revised Edition*, Cambridge UP, 2006. (Cambridge Greek and Latin Classics)

H. Lloyd-Jones, N. G. Wilson, *Sophoclea: Studies on the Texts of Sophocles*, Oxford UP, 1990.

6月11日現在、1032行まで読了。

ギリシャ語初級講読B：プラトーン『パイドーン』講読

テキスト・註釈：J. Burnet, *Plato's Phaedo*, Oxford UP, 1911.

C. J. Rowe, *Plato: Phaedo*, Cambridge UP, 1993. (Cambridge Greek and Latin Classics)

6月11日現在、82eまで読了。

ギリシャ語初級講読C：『ルカによる福音書』講読

テキスト：Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2012<sup>28</sup>.

参考書：織田昭『新約聖書ギリシア語小辞典』第4版、東京：教文館、2002年。

6月11日現在、8章4節まで読了。

ギリシャ語中級講読：『イーリアス』講読

テキスト：M. L. West (ed.), *Homeri Ilias, Vol. 2*, München, Leipzig: Saur, 2000.

註釈：G. Cerri, *Omero, Iliade, Libro XVIII: Lo Scudo di Achille*, Roma: Carocci editore, 2010.

I. J. F. de Jong, *Homer: Iliad Book XXII*, Cambridge UP, 2012. (Cambridge Greek and Latin Classics)

6月11日現在、第18歌を読み終え、第22歌を58行まで読了。

新約ギリシャ語初級

テキスト：土岐健治『改訂新版 新約聖書ギリシア語初歩』東京：教文館、1999年。

受講生の都合により第5課で中断。来学期は新規受講生を募集。

毎年、4・5月には新しくたくさんの子供たちが将棋道場に参加してくれます。5月の将棋道場は20名ほどの子供たちが参加してくれ、久しぶりに満員御礼状態になりました。まだ駒の動かし方も知らない子や、ルールを覚えてたの子、お父さんやおじいさんと指したことはあるけど子供どうして指すのは初めてという子など、いろいろなレベルの子たちが参加してくれています。将棋道場では、ルールを知らない子でも一から教えますので、安心してご参加ください。



ひととおり駒の動かし方とルールを覚えたら、そのあとはすぐ実戦。同じくらいのレベルの相手と指しながら、少しずつ細かいルールや指し方のコツなど覚えていくのが一番だと思います。最初のうちはやはりなかなか勝てないものですが、誰でも10局、20局と指せば、だんだんと勝てるようになってきます。そのあたりから、少しずつ玉の囲い方や、定跡、手筋など、見よう見まねで覚えるようにしていけば、さらに強くなれます。例えば、棒銀を覚える、美濃囲いを覚える、穴熊に組んでみる、など少しの工夫でぐっと勝率は上がります。そのうえで詰将棋なども解くようになれば完璧でしょう。

ときどき、大人の方からも「久しぶりに将棋をやってみたいんだけど、なかなかその機会がない」という話を聞きます。あるいは「今から将棋を始めても強くなれるものですか？」と質問をされたりもします。そこで私がよく引用するのは、プロ棋士の羽生善治さんの名言、「誰でも、どの時点からでも、努力すればアマチュア初段にまではなれる」です。たとえ、50代や60代の方が将棋を始めても、実戦を積み重ね、多少の定跡や手筋を覚え、3手詰めや5手詰めの詰将棋を解けるようになれば、アマチュア初段にまではなれる。だから将棋は何歳から始めるのでも遅いということはありません。あまり難しく考えず、とりあえずたくさん指していれば、自然と強くなっていくのではと思います。

かく言う私も、小学生～高校生のあいだに将棋にハマり、毎週のように関西将棋会館に通って、高校生のときにアマチュア初段を取りました。高校生のときは将棋部に所属し、一度だけ高校生の全国大会にも出場しましたが、それが自分にとっては最上の舞台で、今でもアマチュア初段止まりです。二段、三段以上に上がるまでには、またひとつ別の壁があるように感じています。

とはいえ、アマチュアでも5級くらいのレベルになれば、それでひととおり将棋のことはわかりますし、テレビの将棋番組など見ても十分に楽しめるだろうと思います。また最近、インターネットでの将棋中継やスマートフォン用の将棋アプリなど、さまざまなかたちで将棋を楽しめる環境が増えてきているようです。自分ではあまり将棋を指さず、プロの対戦を見て楽しむファン（観戦専門の将棋ファン）も増えてきているようですし、大人の方でも、関心ある方は今から将棋を始めてみてはいかがでしょうか。私自身も最近ではニコニコ動画の将棋対局中継、スマートフォンの将棋対戦アプリ（将棋ウォーズ）、将棋連盟モバイルなどで将棋を楽しんでいます。そのうち、大人向けの将棋道場イベントなどを企画するのもいいかもしれませんね。

月に一度、小学生を対象にした勉強会がありますが、今回はそのレポートをしてみたいと思います。5月10日、今年度の最初の勉強会の様子です。8時半からの太郎先生の「論語の素読」のあと、勉強会は始まりました。その日は総勢18名が参加し、そのうち8人がピカピカの1年生でした。初参加の1年生のみんなが9時から11時までの2時間をどう過ごせるのか正直想像もつきません。

さて、あるテーブルのストーリーです。お兄さんお姉さんたちは、もう慣れたもの。何も言わずにも黙々と、自分で持ってきたものに取り組みだしました。

そのテーブルの1年生たち3人はまず、覚えてたのひらがなをていねいに、書いていきました。「あ」から「ん」までをそれぞれになんとか書き終えますが、見てみるとやはり「な」行からはむつかしくて、ぎゅっと小さい字になってしまっています。

「もう少し、…こうやねえ」と直してあげて、もう一度書くとうごく上手に書けたので、周りのお友だちにも見てもらいました。すると、同じテーブルに座っていた4年生Kくんが、みんなのひらがなを赤鉛筆で添削してあげる、と言います。この勉強会歴は長く、教えてあげることが上手なさすがベテランさんです。

「お兄さんもな、昔は下手やってん。うんうん、『を』って、むつかしいよな。」お兄さんの手元の赤色を食い入るように見つめ、また一生懸命書き直す1年生たち。

そんな時間が流れました。

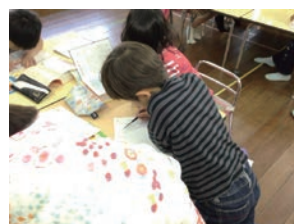
\* \* \*

さて。1時間と少し経って、どうしてもそわそわしてきてしまった1年生さんがいました。普段の小学校の授業は45分。やはりしんどいかもかもしれません。よし、身体を動かしてちょっとお外へ出よう！と、希望者4人でお外に、頭と身体をリフレッシュさせにきました。

5月の風に思い思い身体を動かしてお部屋に戻り、残りは30分。さっきそわそわし始めてしまったMちゃんと、ひらがなを「あ」から「ん」まで大きな字で書いて終わりにしよう！と決めました。できあがった字は、一番最初に書いたひらがなよりも大きく、しっかり書いていました。お兄さんKくんも「おお～、いいやんいいやん！」とにっこり褒めてあげていました。

みんなそれぞれが、自分のやりたいことを最後まで黙々としたり、低学年のお友だちに教える喜びを発見したり、寄り道をしながらもひとつだけ何かを達成したり。

スピードも内容も違うけれど、どの取り組みも、いつもキラキラと輝いて見えます。



——本誌を手にとって下さった方へ

山の学校は、小学生から大人を対象とした新しい学びの場です。「Disce libens. (楽しく学べ)」がモットーです。中高生のための徹底した少人数指導のクラス、社会人のための語学クラスも充実。子どもは大人のように真剣に、大人は子どものように童心に戻って学びの時を過ごします。

「山びこ通信」は、その様子をお伝えすべく、学期毎に年三回発行しているものです（春学期は6月、秋学期は11月、冬学期は2月）。ホームページでも、クラスの様子やイベント（毎月開催・無料）の情報などを発信しています。学ぶことが楽しくて仕方がない！もし、そうした気持ちを本誌を通し、少しでも皆様と共有することができたとすれば、望外の喜びです。

お申し込み・お問い合わせはこちらまで

TEL: 075-781-3215

FAX: 075-781-6073

E-mail: taro@kitashirakawa.jp

<http://www.kitashirakawa.jp/yama-no-gakko>

